

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)

大学院学生研究

2015年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 異文化コミュニケーション 研究科 異文化コミュニケーション 専攻		
研究代表者 (2016年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	異文化コミュニケーション研究科・異文化コミュニケーション専攻・博士課程後期課程二年次	瀧戸 彩花 印	
指導教員	所属・職名	氏名	
	異文化コミュニケーション研究科・教授	野田 研一 印	
自然・人文・社会の別	人文 ・ 社会	個人・共同の別	個人
研究課題	ポピュラー音楽の聴取方法の傾向と分析：歌詞の役割とパフォーマンスに着目して		
研究組織 (研究代表者・共同研究者) ※2016年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	異文化コミュニケーション研究科・異文化コミュニケーション専攻・博士課程後期課程二年次	瀧戸 彩花	
研究期間	2015 年度		
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 200,000 円 / (採択金額) 200,000 円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

現代の音楽に関わる人びと（アーティスト及び制作者、聴衆ほか）の諸音楽体験における聴取活動の諸体系を明らかにし、歌詞及び声を持つ役割と楽曲の持つ諸要素に対する聴衆の認識を解き明かす。聴取傾向の分析では、歌詞及び声、演奏する際の演出を含むパフォーマンスも要素の一つとして取りあげる。その際に、歌詞の翻訳にも着目し検証する。また、カバー音楽の周辺領域であるボッサ・ノーヴァやフレンチ・ポップといったカバー音楽を構成する要素の素となる諸外国特有の音楽から派生した様式も調査の対象とする。研究方法は、主に文献調査（遠方への資料及び文献調査を含む）、楽曲分析（聴音及びオーディオ波形エディタと動画映像の分析）、実態把握の調査（フィールドワーク）である。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 歌詞 (声と文字) } { パフォーマンスと映像 } { 楽曲の知覚 }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

「ポピュラー音楽とは何か」という問いを明らかにするべく、2010 年以降より調査者の研究題材として挙げられる、歌詞、視覚的動作(パフォーマンスや映像)等に焦点を当て、音楽における言語・非言語コミュニケーションの研究の一環として本研究を行った。詳細は、立教大学学術推進特別重点資金(立教 SFR)大学院生研究(以下、「本研究資金」とする)における 2013 年度研究成果報告書「カバー音楽から見る現代の音楽アーティスト像の変容」または 2014 年度研究成果報告書「カバー音楽における身体・声・象徴:音楽著作権とパフォーマンスの観点から」を参照されたい。一部の参考文献についても上記で言及している。近年顕著であるニコニコ動画における「歌ってみた」や「踊ってみた」を始めとする諸楽曲や映像もカバー音楽の一類とし、人と音楽のコミュニケーションを検証することで、現代の音楽に関わる人びと(アーティスト及び制作者、聴衆ほか)の諸音楽体験における聴取の諸体系を明らかにし、歌詞(声)が持つ役割と楽曲の持つ諸要素に対する認識を解き明かすため、本特別重点資金に採択された 2015 年 6 月初旬から 2017 年 3 月下旬まで資金を活用し調査した。特に本報告では、文献調査と楽曲分析について特筆する。また、今年度の研究では主に 1)2000 年以降のカバー音楽(同人音楽を含む)、2)2000 年以降のボッサ・ノーヴァ及びフレンチ・ポップに着眼して研究を行った。本研究では、調査事項とそれに対する調査方法が多岐に渡ること、また紙幅の都合上、調査の概要や調査結果において主要な部分を記載することとする。

1. 各調査方法と成果内容

①文献調査

主に音楽関連の書籍より、ボッサ・ノーヴァやフレンチ・ポップの歴史を調査する。また、音声生理学(『音感覚論』)などの声に関する書籍にて声の歴史を調査し、古典書籍を参照しつつ、理論の構築を目指す。

現在頻繁に聴かれており国内に流入してくるボッサは、発祥の地であるブラジルではあまり聴かれていない様子であり、大衆的とは言えない(東, 2003)。しかし、国内で著名なボッサ・ノーヴァ調として、国内で生み出された楽曲のカヴァーが挙げられることが多く、それら歌われている翻訳後の楽曲映像の視覚的な効果において興味深い現象が見られる。

②楽曲分析

・分析 1

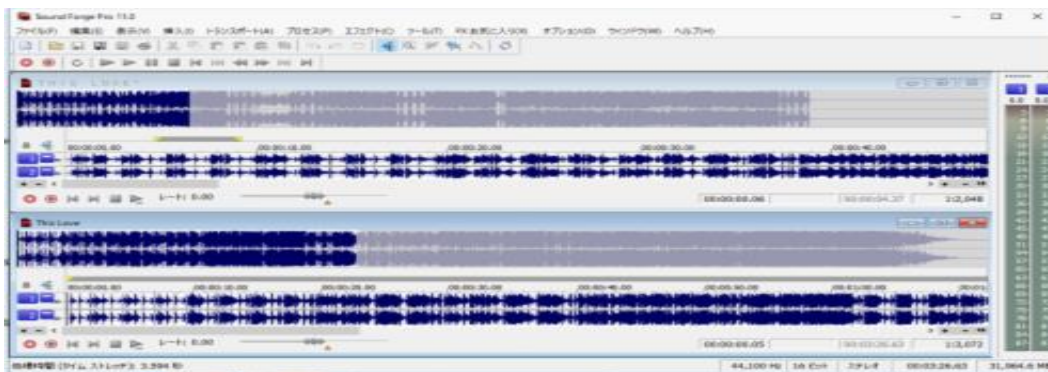
分析に使用したソフトは、SONY のオーディオ波形エディタ『Sound Forge Pro 11』である。タイムストレッチでテンポ(BPM)を調節し、原曲に限りなく近いテンポに変換する。テンポは原曲に寄せると約 112~113BPM になると推察され、カヴァー曲のオリジナルと比較すると比率が約 106~107%となる。カヴァー曲は原曲よりもテンポアップされており、全体的なノリは加速する傾向となる。また、ボーカルトラックのみを限りなく消去した形にすると、原曲ではバスドラムの 4 つ打ちが目立ち、それとともにバックギンでキーボードが一定のリズムを刻む。この 4 つ打ちはダンス・ミュージック等に顕著なリズムである。それに対して、カヴァー曲(テンポ切り替え後)では 2 拍目と 4 拍目に主な拍が来ており、裏打ちの状態となっている。そのため、比較的カヴァー後の楽曲はディスコ・ミュージックに近いものではないかと推測される。また、上記を踏まえた上で、フィールドワーク調査におけるライブの様子を考察すると、ライブ空間において、聴衆は歌詞を聴くよりも、その場で鳴り響く音に対して反応しているように見受けられた。また、アーティストのかけ声や合図に応じて、記憶している楽曲のリズムを刻む行為が目立っていた。カヴァー楽曲において重要な要素は、歌

詞よりも、リズム、アーティストの身振り、所謂パフォーマンスにあると考えられる。

ここで挙げた例の他に、合計 57 曲の楽曲を分析した

・分析 2

ここでは、ボッサ・カヴァーの歌手として有名なクレモンティエの楽曲を例に行った検証を記載する。楽曲は国内でもスタンダード・ナンバーとして認識されているものがほとんどである。例えば、『残酷な天使のテーゼ』はカラオケのトップにランクインしており、世代を超えて認知されている楽曲である。原曲とは異なり、ギターが先行し旋律(歌詞)に相当する部分が表拍で始まりず裏拍からの歌い始まりとなる(2 拍目である弱拍)。



研究成果の概要 つづき

ボッサ・ノーヴァの基本的なリズムに象徴されるように、クラシックギターを用いたタータツ(休符)タッターのリズムが楽曲全体の流れを生み出している。この他計 23 曲の分析を試みたが、どの楽曲も、旋律、歌唱、所謂メロディーラインの大幅な改編は見られず、楽器群でその楽曲のアレンジを行っている傾向にあることが分かった。また、上記の点で、例えば翻訳された言語(もしくは歌唱者の用いる言語)を用いて歌唱したとしても、視聴者は感覚的にその歌詞の意味内容を捉えている。

広く認知されている楽曲で、多少の翻訳後の言語が分かるものであれば、旋律と歌詞内容を保持したものを原曲に近い形で捉え、更に、特に映像がある場合は、視覚的な情報も加えて楽曲を認識することができている(なお、ここでの分析には、付属 DVD と 2014 年度の研究に用いたニコニコ動画での放送を視聴し記録したものをを用いた)。これらのことから、原曲の保持はメロディーラインが担うことが多く、聴衆もその楽曲を認識するための鍵として、歌唱者を捉えていると言える。また、楽器編成によって、原曲を原曲足らしめる要素はひとえに歌唱者の影響が強いのということが述べられる。構成する要素は変容しても、原曲のメロディーラインが維持されていれば、聴衆はその楽曲をカバーと見做し、原曲のアレンジとして認識する。そして、一般的によく知られている曲に関しては、言語が異なっても、一つの音に当てはまる言葉、発生される声当てはまっています、歌詞の内容を記憶していれば、歌詞の内容も把握して聴くことが可能である(実際に、ネット上の動画には言語化された記録が残っている)。しかし、楽曲の知名度が低い場合にはこれの限りではない。当初の仮説である「視聴者は言語よりも楽曲のフレーズ、旋律(メロディ)やパフォーマンス(身振り)、を重視して楽曲を聴いている可能性が高い」という点に対して、言語よりは比較的上記を重要視している傾向が見られた。比較対象として、今後、スタンダード・ナンバーでない楽曲、既知でない楽曲を視聴した場合の反応も検証したい。

その他の調査概要と特筆すべき事項

・所属の研究機関での文献調査

2015 年度 4 月から在籍した国際日本文化研究センターへ文献調査。所属の研究機関における指導並びに関連する機関での文献調査では、研究機関に訪問し、付属する図書館にて図書資料を閲覧した(計三回の訪問、内、本研究費用からは一回分を充填した)。主に、ラテン音楽に関する資料、言語学、音楽領域の資料を閲覧した。

・各種音楽イベントにおける実態把握の調査

各種音楽イベントに定期的に参加することで、当事者であるアーティストと聴衆、またそれらを運営するスタッフの実態を明らかにする。各種音楽イベントとは、具体的には、ライブ(屋内外)、コンサート(屋内外)、催事、即売会イベントのことを指す。参加型のイベントには自らも参加する参与観察を用いた。フィールドワークの日程は、以下に記す通りである。

6 月に電子楽器関連のワークショップへの参加(本研究の調査内容であるが、本研究資金は活用していない)。7 月から 8 月にかけて、カバー楽曲をリリースしているアーティストのトークライブに参加した。

・採譜には楽譜作成用のソフト、finale を用いた。

・楽曲の選出、ヒット曲については、『青春グラフィティ邦楽・洋楽ベストヒット』シリーズや『ビルボード年間チャート 60 年の記録 1955-2014』等を活用した。

・他、歌詞や翻訳の理論等、複数の書籍を用いた。

3. 得られた結果と今後の展望

ライブ空間におけるカバー楽曲の演奏の聴取において、聴衆は、原曲通り(翻訳されていない状態)の英語歌詞を視聴した際に、パフォーマンスや歌声、その際、歌詞の持つ意味よりもその場のノリや楽器が打ち鳴らすリズム及びボーカルの旋律を意識して聴取することが分かった。また、日本語の歌詞を他言語にしてカバーした場合には、記憶が重要なタームとなることが発見された。

今後は、2014 年度の研究成果と 2015 年度の本研究成果を踏まえて、更にカバー音楽の歴史を調査し、より詳細な歌詞の翻訳について調査していきたい。また、今回実施するに至らなかったアンケート調査も行いたい。次年度では上記の点の改善を計画している。我々は何を聴き、何を歌っているのか、それらを明らかにするために今後も調査を続けていきたい。

参考文献

東琢磨(2003).『全-世界音楽論』青土社.

※この(様式 2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① [雑誌論文]

〈投稿を予定している学術雑誌〉

立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科『異文化コミュニケーション論集』に論文投稿を予定。

日本ポピュラー音楽学会 (JASPM)『ポピュラー音楽研究』に研究成果の投稿を予定。